『味覚の生理学』におけるネオロジスム
—— 表現の観点からみる « Goût » の重層性について ——

加　藤　三　和

はじめに

本稿は，ブリア＝サヴァラン（Brillat-Savarin, 1755-1826）の『味覚の生理学』（*Physiologie du Goût*, 1825）における，« goût » に関する一考察である．とりわけ今回は，「語り」という観点から « goût » の持ちうる意味に注目し，ブリアにおける新語主義的側面に焦点を当てることによって，食に関する言説の中で言語そのものがどのような意義を持っているのか考察していく．

« Goût » という語は本来，「味覚」だけにとどまらず「趣味」「食欲」「好み」といった重層的な意味を持つ．にもかかわらず，これまで『味覚の生理学』においてブリア＝サヴァランは，この語を「味覚」に結びつけながら使用していると考えられてきた．実際，食物に関する歴史や，食べ方についてなど，食に関する様々な観察を「瞑想（Méditations）」という形式で扱ったこの作品は，特に「食」という観点において注目されている．これまでの研究においても，文化史，あるいは社会学的な観点から，食の文化的行為における歴史的資料として取り上げられることが極めて多い．

しかし実際には，『味覚の生理学』の題名に含まれた « goût » という語そのものが複合的な意味を持っているように，作品が取り扱う内容もまた，単なる文化史的な食行為の記録にはとどまらない．事実，作中では食とは一見何の関係もないような「眠り」や「夢」，ひいては「人類最後の日の様子」といった多岐にわたるテーマが取り上げられ，« goût » の訳語の一つである「味覚」という意味には収まらないような多義性を読み取ることができる．そして « goût » にまつわるこうしたテーマは，ある場面においては著者自身の個人的な推測や観察の記録として描かれ，また別の場面では，実際に当時出版されていた医化学の論文や，生理学に関する研究書などを参照しながら，学術的な様相を呈しつつ語られている．多岐にわたるブリアの観察の中でも，特に彼の関心が表れているのが，言語に関す

る考察だ．各人の人格の判断基準を，何を食べているか，ではなくその表現に求めようとするブリアの姿勢は極めて特徴的である[1]．また，こうした言語や表現に対する関心は作品全体を貫いており，ブリアにとって言語表現と食が密接な結びつきを持っていることが見て取れる．

そこで本論文では，まず，ブリアにおける言語の問題がなぜ重要となるのかを明らかにし，ブリアにおける新語とはどのようなものであるかを探っていく．第二章では実際に『味覚の生理学』の中に散見される新語を取り上げ，具体的に作中における効果と意義について考察する．また，様々なテクストの中でも特に小説において，19 世紀以降に出版された小説の中からいくつか場面を取り上げ，新語の使用がどのような効果を持っているのか見ていく．またブリアと同じような新語の用い方は，どのような点に関連するのか，あるいは関連しないのかについても検討していく．

1.『味覚の生理学』における言語の問題

食に関する書物と言われる『味覚の生理学』について，そもそもなぜ新語や言語が問題となるのか，その理由にまず，彼自身によるネオロジスム（néologisme）への言及が挙げられよう．ブリアは作品冒頭部に置かれた「序」において，本文を始める前の段階で次のように宣言している．

> つまり私はネオローグたち（*néologues*）の味方であり，ロマン主義者たち（*romantiques*）にすら与しているのです．後者の人々は隠された財宝を発見し，前者の人々は必要となる糧を遠くまで探しに行く航海者のようなものです[2]．

ネオロジスムとは，ギリシア語で「新しい」を意味する « néo » と言語を指す « logos » が組み合わさって作られている通り，一般的に「新しい語」あるいは「すでに存在している語に付与された新しい意味」の誕生に対して用いられる[3]．ブリアが上の引用において使用しているネオローグという言葉も，こうした一般的なネオロジスムを実践する人ととらえることが出来るだろう．しかし，言語の使用に関して非常に政治的な議論がなされてきたフランス語の歴史に鑑みて彼の発言をとらえ直してみるならば，ブリアがここで「ネオローグ」（néologue）という語に言及している点は非常に興味深い．というのも，マレルブの発言を契機としてフランス語の純化が推奨され，その結果ラシーヌやモリエールといった古典主義的演劇作品が模範的とされたのに対し，これに真っ向から異議を唱えたロマ

ン主義運動が推奨したものの一つが，まさに新語の使用だったからだ．啓蒙思想家を敬愛しつつ 18 世紀後半を生き，ロマン主義の幕開けを象徴する『エルナニ』（1830）の初演を迎えることもなく死を迎えたブリアが，先のようにロマン主義に言及したうえで敢えてネオロジスムに与すると語る点には，何かしら意図があると考えられるだろう．

実際，作品の第一部に先立ち様々な前提が説明される「序」では，食をテーマとする本作品の経緯と動機が描かれているにも拘わらず，その大半は言語に関する考察に割かれている．これは，ブリアの同時代に，« goût » について書くことの困難さを端的に示しているのみならず，この分野における開拓者であるという彼自身の自覚をも示しているといえるだろう．つまりブリアは，« goût » という主題に対して意識的であっただけでなく，同時にそれについて「書く」ことに対しても非常に慎重であったと考えられるのだ．

その証拠に，彼の作中における言語に関する考察を詳細に見ていくならば，これが当時のアカデミーに対する批判となっていることが容易に見て取れるからである．

> 私はかつて学士院で，ネオロジスムの危険性と，優れた世紀の作家たちによって定められたわれわれの言語に執着すべきであるという点について，すこぶる優雅な演説を拝聴したことがあります．
>
> 化学者のように，わたしはその演説をレトルトにかけてみました．すると，結局次のものしか残らなかったのです．「われわれはたいへん立派なものを造りあげたのだから，これ以上素晴らしいものは成しえないのであり，またこれ以外に成しえようもない．[4)]」

「序」のはじめにおいて，「私の文章は名文であるべきだった」と語るブリアは，啓蒙の世紀を代表するルソーやヴォルテール，さらにはビュフォンの「文は人なり」という例文を実際に引用しつつ[5)]，彼らの作品を暗記するほどに心酔してきたと説明する．しかし，こうした名文の書かれた時代における，表現方法に関する模範的見解に対してブリアは，上記の通りアイロニカルかつ，批判的な目を向けている．その理由は何よりもまず，ブリアが実際に作品の中で頻繁に用いる新語の使用を正当化するためであると考えられる．しかしそれは，古典主義作家たちを否定するという意思に基づくものではないことが次のように記されている．

わたしは厳格な先生がたが，ボシュエやフェヌロンやラシーヌやボワローやパスカルや，その他のルイ14世時代の大作家たちをあげて抗議されるであろうことは覚悟のまえです．どうやらその叫喚怒号が今もこの耳に聞こえてくるような気がします．

それに対して，わたしは平然としてこう答えるばかりです．何もわたしはそれらの作家たちの真価を軽蔑するものではありません，と．では結局どういうことになるか．べつにどうでもありません．ただあれほどやくざな道具を用いてさえあれだけのものが出来たのであるから，もっとすぐれた道具を用いたら，それこそ他の追随を許さぬものができたろう，というだけなのです[6)]．

それでは，ブリアの新語擁護の動機はどのような点に見出されるのだろうか．まずは，本文の「第一部」，「味覚について」の中に見つかるブリアの言葉を見てみよう．

ところが今までのところは，何かの味わいが厳正確実に鑑定されたようなことはまだいっぺんもなかったから，人はわずかに，ほんのりと甘いとか，甘いとか酸っぱいとか渋いとかいうような一般的表現に訴えるよりほかにしかたがなかった．それらはさらに煎じ詰めると，快い味，不快な味という二つになってしまうが，それでもどうやら，自分の味わっている有味体の味的特徴をわかってもらい，また人に示すのには事足りている．

われわれより後に来る人たちは，もっとたくさんの表現法を知るであろう[7)]．

バニラやコーヒー，ショコラなどといった「新しい」食物が多くヨーロッパに持ち込まれたのは，17 世紀および 18 世紀においてであり，香辛料がヨーロッパ世界において画期的な « goût » の発見であったように[8)]，新しい嗜好は新しい表現方法や思考法をもたらした．こうした歴史的背景を考慮するならば，かつて存在しなかった食物を説明するために，新しい語が必要となるのは容易に理解できよう．この点に鑑みれば，ブリアの扱う主題の性質上，新語の使用は免れず，またこの動きを推奨したロマン主義派に与するという発言も決して突飛なものではない．

ところが，ブリアの関心は，新奇なものに対する「名付け」によって満足するには留まらず，そうした新たな「味」を表現するための手段である言葉の「改良」にまで向けられている．以下に挙げる抜粋は，彼の言語自体への強い執着が垣間見える一部分である．

つまりわたしは腹の底から信じているからです．わたしの使用するこのフランス語は他国語に比較して貧弱であると．ではどうしたらよいか．借りるか，盗むのです．

わたしは両方やらかしました．なぜならこの種の借用は返還の対象にはならないし，語の窃盗は刑法には触れないからです[9]．

実際，「序」の最後で，「私がわたくしと単数形で書き，また話すときには，読者とのおしゃべりを想定しています．［中略］しかし私が重々しいかのわれわれという言葉で武装しているとき，私は教授しているのであって，これには従っていただかなければなりません．[10]」とブリアが述べるように，彼は「私」と「われわれ」の書き分けをはっきりと区別して読むことを読者に促し，『味覚の生理学』が特に「書かれたもの」であることをわれわれに意識させる．また，実際に本文を紐解いてみると，ラテン語，ギリシア語，さらにはドイツ語やスペイン語が多く用いられ，特にラテン語とギリシア語から着想を得てつくられたブリア独自の単語や表現は，単なる言葉遊びにはとどまらず，時代性を反映した一過性の造語ではないことは極めて明白である．こうした点からブリア＝サヴァランの新語の使用を検討してみるならば，作者の選んだ « goût » というテーマの新しさと複雑さ，またそれを語ることへの様々な工夫が，ブリア独自の言語表現への執着を詳細に見ていくことによって明らかになるとも考えられる．

2.『味覚の生理学』作中における新語

それでは，『味覚の生理学』の中で新語はどのように現れ，またその効果と用法にはどのようなものがあるだろうか．ここでは，ブリアが実際に作中で使用している新語，あるいは独自の表現を取り上げ，その一つ一つを具体的に分析していく．

個別の分析に入るまえに，『味覚の生理学』において新語が用いられる際に特徴的なイタリックの使用法について確認したい．というのも，「語る」ことに意識的だったと考えられるブリアは，新語を用いるほぼ全ての場合において，表記の方法にも変化をつけており，読者にそれと判るようにイタリックと地の文を書き分けているからだ．まず，作中において最も多くこの活字体が使用されるのは，話題が切り替わるとき，あるいは医学や化学の専門用語や，殆ど死語となったような珍しい単語を使用する場合である．この時，ブリアは特にイタリックを多用し強調する．これは第一

に，イタリックで書かれた語が特別であることを示すブリアから読者への目配せであるが，その動機の大半は，強調による読みやすさの確保への配慮であるといえよう．また，先の使用法とは別に，話題が性的ないしは排泄に関わるようなものであるときも，ほぼ確実にイタリックが用いられる．話題が下半身に関わるコノテーションを帯びるとき，あるいは書かれた語がブリアの意図的な創作によるものであるとき，著者は敢えて別の活字体を用いて，手の内を明かすことによって，作品全体にユーモラスな効果を与えるように描き出している[11]．

こうした二つの使用法について，まず具体例として挙げられるのは，専門用語を用いて語の意味を定義しようとする場合における新語の使用である．特にこれは，« goût » について科学的な観点から言及する際に多く見られ，第一部の中で頻繁に用いられる．

> 私はさらに，［人間の舌において］動物には見られない知られざる運動を少なくとも三つ発見した．そしてそれを私はそれぞれを穂帯運動（mouvements de *spication*），回転運動（*rotation*），箒運動（*verrition*）と名付けている[12]．

上の抜粋は，「味覚について」の章における，人間の舌の運動についての解説の一部である．ここでブリアは，食べ物が口へ入って来た後に起こる舌の運動を説明するために，三つの「運動」を区別している．一つ目の « spication » は，もともとラテン語で麦を意味し，外科の医学用語として「麦穂帯」という包帯の巻き方を指すために使われていた « spica » という言葉を，その語源となるラテン語にまで遡り，名詞をつくる接頭語である -ation を加え新語を生み出している．また，三つの運動の最後に並べられた « verrition » もまた，ブリアの新語だ．原文にはその語源と活用がブリア自身の手による注として括弧で説明されているが，箒のような運動を指し示すこの « verrition » は，ラテン語で「箒を掃く」を意味する動詞の一人称主格 « verro » に，先と同様名詞を作り出す接尾語を足して作られている．ここでは，それぞれの舌の運動が麦や箒の運動に似ている点に着想を得たうえで，医学用語として用いられてきたラテン語を援用しつつ，さらにそれを今までなかった形で名詞化するという作業が行われている．さらにまた，こうした新語は生理的な運動だけにとどまらず，食物についての説明の中にも見つかる．

> ショコラがこのように種々の特徴を持っている理由は，実は，ショコラというのがオレオサッカルム（*oleosaccharum*）以外の何物でもないという点にある．同容積においてこれを上回る栄養素を含んでいる物質は殆どない．つまりこの物質は殆どすべて動物化（*s'animalise*）されるのである[13]．

ここでもブリアは，ショコラの正体を栄養素という科学的な視点から説明しようと試みており，その際に油を意味するラテン語 « oleum » と，当時の砂糖の原材料であったサトウキビを指す « saccharum » をつなぎ合わせ，「オレオサッカルム」という名詞を意図的にイタリックで強調している．ショコラという誰もがその対象を思い浮かべることのできる食物を，「オレオサッカルム」という語で語る彼の手法からは，読者に対しこの作品が玄人向けであるかのような印象をアイロニカルに醸し出そうとする意図が見て取れる．この背景には，同時代においてあまり議論の対象とならなかった「味覚」をブリア＝サヴァランが主題とし選択しているという経緯がある．いわば「世俗的」と見なされていたテーマについて語るために，ブリアはこれを半ば真面目に科学として語ろうとしているとも考えらえるのだ．実際，技術や様々な「発見」に伴い，今日においても科学は常に新しい対象を名指す語を必要とする．この科学の分野における特徴をうまく利用し，新語が生まれやすい環境を効果的に活用しているのが先の例文であるといえよう．しかし，以上の二つの新語とその用法から浮かび上がるのは，時代的背景における「味覚」についての状況よりもむしろ，ブリア自身の表現に対する強い関心であり，その裏にある「味覚」について書くことへの開拓者としての意識が，ここでも確認できる．

ブリアの新語使用は，科学的な観点から書かれた « goût » だけでなく，以下に挙げるような，食に関する個人的な想い出話の中でも用いられている．

> そういう灼熱のような暑さのところにいたので，彼［ブリアの友人］は飲み物係りの召使い（serviteurs *potophores*）をわれわれのもとへ呼んだ．その給仕人たちは氷の詰まった皮の袋の中に，気分を爽快にしてくれるような，あるいは元気回復のためにわれわれが欲しいと思うような飲み物をすべてそろえていた[14]．

上記の引用は第一部後半に置かれた「狩猟の中休み」というエピソードの

中の注である．アメリカ亡命中に友人と狩猟に出かけた際のピクニックの想い出を語る場面が描かれたこの章では，休憩している最中に友人が呼び寄せた飲み物持ちの使用人が，« potophore » という語を使って語られている．この用法は現在，『トレゾール』の電子版の中にブリアの引用とともにおさめられているが[15]，実はこの本文の注にはさらなる注が付されており，そこには彼の友人がこの語を「ポトフ（pot-au-feu）」に似ていることを理由に，既に普及していた « œnophore » という語を使用することを勧めたと記されている．既に存在する語を使用せず，わざわざ新しい語を創造して語り，さらにそこから連想されるポトフと結び付けて注に添えるというブリアの手法は，「ないものは創造するか盗む[16]」という彼自身の言語使用に関する宣言を，そのまま実践していると理解できるだろう．さらにこうした細かな表現へのこだわりは，殊に食べ物に関して顕著である．薄く切ったパンをフランス語で « rôtis » と記した後に「トースト」（toasts）と括弧で英語を添えたり，あるいはスイス起源のフォンデュを紹介するに当たってイタリックを用いてわざと強調するといった工夫からは，単に読者の内容理解の手助けという著者の配慮を越えて，それまでフランス語には存在していなかった新しい「味」としての « goût » を，表現のレベルにおいても多様化しようと試みるブリアの意志が垣間見える．

しかし，『味覚の生理学』において最も注目すべき点は，食べる行為，あるいはその対象に関する言説にも全く関係ないような文章における新語の多用であろう．こうした新語のほとんどは，イタリックにはなっておらず，さらに完璧なシンタックスの中にはめ込まれているがゆえに，注意深く読まない限り見落としてしまう．それほどまで地の文に溶け込んだ新語は，実はブリアが使用する新語の使われ方としては，かなり頻度が高い．この類の用法には，たとえば以下のようなものが挙げられる．

> 私が時々，あまりに調子に乗って筆を走らせすぎるとか，少しばかりおしゃべりが過ぎる（je tombe un peu dans la garrulité）と言って咎める方もおられることでしょう[17]．

> 人は渇いてくると，口や喉，そして胃などにあるあらゆる吸収部が攻撃され，刺激される（nérétisées）のをはっきりと感じる[18]．

公衆の皆さまがたが，審議会で判定器の討論がなされたときの速記録（relation

tachygraphique）をご覧になれなかったのは残念である[19].

上記の三つは，それぞれ全く異なるエピソードの中の一文であり，いずれも各章の内容の要旨には直接関係ない部分において新語が使われている．各文の重要度が作中において極めて低いだけでなく，たとえそこで使われる新語の意味が分からなくとも，理解には支障を来さないのが特徴だ．しかし，たとえば « garrulité » という言葉一つ取ってみても，ブリア自身の意図的なこだわりは顕著である．この語は，13 世紀に聖フランシスコが用いた「鳥のさえずり」を意味する « garruler » から着想を得ており，当時でも既に珍しかった語をブリアがいわば「発掘」し，これを名詞化している．また二つ目の「渇きについて」の章の中に見られる « nérétisé » という単語は，いずれの辞書にも着想の契機を直接に示すような手掛かりはなく，もはや文脈と語源から意味を判断するしか手立てがない．しかし，彼の語学への関心と医学的な知識，またこの語の使われている文脈を考慮するならば，ギリシア語で「刺激」を意味する « éréthismos » から派生した医学用語 « éréthisme » から作られ，そこに「神経の」という形容詞 « nerveux » が掛け合わされたと考えることができるだろう．さらにこの語の持つ Neretis という響きは，海の神ネレウスの子供の名とも呼応しており，「渇き」というテーマに敢えて用いられたと考えることも可能である．そして最後に挙げた « tachygraphique » という形容詞は，「美食判定器」の章で初めて登場する語である．「速記術の」という意味のこの語は，ブリアの新語の中では現在も使われている用語の一つであり，もともとあった「速記術」« tachygraphie » という語を形容詞化した代表的な例文として，『トレゾール』の中に先の引用文が記されている[20].

このような新語の他にも，ボカッチョの『デカメロン』（1348-1353）で使われた語を数世紀の後再導入した « funéral » という形容詞や，ブリアがつくった語としては最もよく知られている « convivialité[21] »，さらに音楽の調性 « tonalité » からつくられた « tonalisation » などは，どれも作者の意図的な語の推敲を経ていることがうかがえる．また，辞書の中ではこうした語はすべてブリアの例文とともに定義され，現在もその創作の跡を辿ることが可能である．

しかし，ブリアのつくり出した新語の多くは，彼だけが使用したと思われる一度きりの語ばかりであり，言語学的には「ハパックス」に分類することができる[22]. また各章で問題となる内容と照らし合わせてみても，イ

タリックで書かれた強調語に比べその使用の必要性も重要度も低く，まるでブリアの個人的な，密やかな愉しみのためだけに使用されているようにも見える．だが，『味覚の生理学』における新語使用の意義は，むしろこの何気ない地の文の中に見出すことができるのではないだろうか．というのも，既存の語や既に使われている平易な表現を脇へ置き，同じ対象を敢えて自ら生み出した語で説明しようとするブリアの姿勢は，単に彼の「語る」ことへのこだわりを示すだけではないように思われるからだ．

> B=Sは間違いなく，舌/言語（langue）と恋愛関係のきずなによって結ばれている――ちょうど食物の場合と同じように――．すなわち彼は，言葉の物質性そのものにおいて言葉を欲する．［…］ネオロジスム（あるいは稀語）はB=Sの作中においてあふれんばかりだ．［…］B=Sは，トリュフやマグロ入りオムレツ，マトロートを欲するように言葉を欲している．［…］B=Sの舌/言語（langue）は文字通りグルマンド（*gourmande*）であるといえよう[23]．

上の引用は，1975年にエルマン版『味覚の生理学』の前書きとして付された，ロラン・バルトの筆による断章の一部である．「ラング」と題された断章の中でバルトは，実際にいくつものブリアの新語を列挙しながら，舌と言語の両義性を巧みに重ね合わせつつその境界の曖昧さを指摘する．と同時に，ブリアにおける新語の使用が，食物と同レベルにあること，すなわち新語は，作中で喚起される様々な料理の数々と同様，舌/言語を使って味わわれることを前提としている点をも明らかにしている．つまり，ブリアにおける言語表現へのこだわりは，舌/言語を通して明らかになる，「趣味」としての « goût » につながっていると解釈可能なのである．

新語使用に顕著にみられるブリアの言語表現に対する執拗なまでの執着は，一方では半ば自己満足的な文体を読者の前に提示しつつも，「味覚」という訳語には収まらない « goût » の持つ複合的な側面を見せてもいる．既存の語が存在するにも拘わらず，乱用とも言えるほど各章に散りばめられたこのような新語の数々は，語ることそのものに対する作者の個人的な快楽を露呈しているだけではない．むしろその形跡を新語という形で提示することによって，口を通して味わう「味覚」« goût » について語りながら，同時にそれがブリア自身の様式ともいうべき「趣味」« goût » を生み出すことに寄与してもいるのである．

3.『味覚の生理学』出版以後の小説における新語の意義

さて，先の章では『味覚の生理学』の中における新語の使用が，「味覚」としての « goût » だけでなく，表現のレベルにおける「趣味」« goût » にも関係している点を確認した．本章では，ブリアの作品以後に出版された小説の中から，まずは新語に対する小説家たちの態度をいくつか紹介したうえで，それぞれ具体例を挙げながら，新語が登場する場面についての考察を試みたい．

第一章においてネオロジスムに関するブリアの引用を取り上げたが，そこでネオロジスムと並んで言及されていたのが，ロマン主義であった．実際，多くの規則や模範に則った言語観に抵抗したロマン主義の文学作品は，演劇作品以外にも小説という新しいジャンルで花開き，そこにはかつて盛り込まれることのなかった訛りや俗語，そしてさまざまな手法が導入された[24]．

しかし，ブリアの生きた 18 世紀後半において，また『味覚の生理学』が出版された 1825 年において，ロマン主義は未だ全盛期を迎えるには至っておらず，この語を発する際に彼の念頭にあったのは，おそらくシャトーブリアンやラマルティーヌ，スタール夫人らのそれであると考えられる．したがって，ブリアの用いる「ロマン主義」という言葉は，現在一般的に用いられているような意味においてのロマン主義ではなく，むしろその語源となるロマネスク « romanesque »，たとえばセヴィニェ夫人が書簡の中で使用している「何か素晴らしいもの，まるで小説の中で語られる冒険譚のようなもの」を指し示す語ととらえるべきだろう．また，ブリア自身によるネオローグ，「ロマン主義者」擁護の宣言は，後に続く説明から，1830 年以降のロマン主義者たちのような反古典主義という意味に理解することは難しい．というのも，以下に挙げるように，たとえばロマン主義文学の旗手とされるユゴーは，ネオロジスムに関して両義的な位置付けを行っており，その言葉の用い方は既に古典主義を念頭に置いているからだ．

> 私は良き趣味と古臭いフランス語の韻文を押し潰した．
> […]
> 聖なる進歩であるそなた，革命よ，
> 今日大気の中，声の中，そして書物の中で震え，
> 脈打つ言葉の中で（mot palpitant）読者はそれが生きているのを感じる．
> 彼女［革命］は叫び，歌い，教え，そして笑う．

その舌はその精神と同様に鋭敏である．
それは小説の中にあり，女性たちに向かってひそやかに語る[25]．

これは 1830 年の七月革命を期に古いフランス語に対し様々な表現の自由をうたい上げた部分であるが，ここでユゴーは新しく生まれる言葉を « mot palpitant » と形容し，その舌（langue）は鋭いと表現する．ところが彼は，ネオロジスムに対して悲観的でもあった．

ところで，こうした新しい語は，発明された語であり，人工的に作り出された語であって，言語の網を破壊してしまう[26]．

新しい言語表現が広まるなかで，様々な日常用語が文学作品の中に持ち込まれることに対するユゴーの二つの見解は確かに，ネオロジスムがややともすると一時的な若者言葉や俗語の繁用にしかつながらないという側面を的確に指摘している．実際，新語の導入に積極的であったといわれ，現在も使われている « fort de café[27] »（＝許容しがたい，根拠に欠ける主張の意）などの生みの親でもあるバルザックにおいても，新語に関してカリカチュアルな態度を見出すことが出来る．その一例として，『幻滅』（1843）の中に見られるバルジュトン夫人の描写を見てみよう．

彼女［バルジュトン夫人］には長々とした文章を大げさな言葉で飾り立てるという欠点があった．こうした文章は，新聞用語でタルティーヌ（*tartines*）と巧みに呼ばれている．新聞は毎朝この消化の悪い（fort peu digérable）タルティーヌを切り売りし，購読者はそれをどうにか飲み込む．夫人は法外なまでに最上級を大盤振る舞いし，自分の話を誇張していた．そのためちょっとしたとるに足りないことですら巨大な形になるのだった．すでにそのころから彼女は，すべてを類型化し，個別化し，総合し，脚色し，優等化し，分析し，詩的にし，散文化し，巨大化し，天使化し，新語化し，そして悲劇化しはじめていた．というのも，ある種の女性の持つ新しい奇癖を描くには，しばしの間，言語（langue）を力ずくでねじ伏せなければならない（violer）からだ[28]。

ここでは興味深いことに，ジャーナリズムにおける「タルティーヌ」という用語が食物としてのタルティーヌに見立てられ，「消化」や「飲み込む」という単語が比喩的に用いられている．また，バルジュトン夫人の冗長な

話し方の特徴は，表現方法においても実践されており，先の引用では，食べ物としてのタルティーヌがパンの上でタルティネされるかのようにして，造語の入り混じった « -er » 動詞が長々と続いていく．さらにこの長々と続く動詞のリストは言語と舌を意味する « langue » に集約され，これがいわば言語の規則を犯す / 舌を力づくで使わせるという二重の意味において，風刺化されている．ここで登場する動詞の一つに「新語化」（*néologiser*）が挙げられており，バルジュトン夫人の特徴を例に挙げつつ，過度に誇張された表現法の一つとして，新語の濫用に消極的な意味が与えられている．このような新語を用いたカリカチュアは，たとえば同じバルザックにおいて，『ゴリオ爺さん』の中のヴォケー館での会話にも見ることが可能である．学生たちが当時のジオラマの流行をもじり，語尾に「ラマ」を付けた意味のない会話が続く場面では，「こうした冗談の根幹は一年以上続いたためしがない」と，新語使用の一過性について語り手の口を通して「くだらない言葉遊び」に分類されている[29]．

ブリアにおけるネオロジスムが「味覚」としての « goût » を豊かにすると同時に，語ることそのものに対する快楽の増幅に寄与するとするならば，このようなロマン主義者たちの新語の使用はむしろ，新しい表現そのものの表出と肯定という点において，積極的に取り込まれてきたと考えられるだろう．

ところが，ブリアの « goût » と新語のむすびつきを，食卓やロマン主義という観点からではなく，語る快楽という点から考えてみるならば，意外にも時代をはるかに下って，プルーストの以下のような箇所に通じているのが読み取れる．

> 「愛の営みをする」という意味のこの特殊な言い方は，そのさまざまな同義とかならずしも同じことを意味していたわけではないのかもしれない．男がどれほど女あさりに飽き飽きし，いかに違うタイプの女をものにしても結果はいつも同じで前もってわかっていると考えたとしても，相手がなかなか落としがたい女で，［…］その女をものにするには交際中に生じたなんらかの思いがけない出来事をきっかけにするほかない場合，肉体所有の行為はいつもと違って新たな快楽となるからである．［…］おまけにスワンがすでに感じていた快楽は，オデットは気づかずに大目に見てくれていると本人が想いこんでいただけに［…］なおのことそれまでは存在しなかった快楽，自分が創り出しつつある快楽，つまり―スワンがそれに与えた特殊な呼称［カトレア］がその痕跡をとど

めていたように―完全に特殊な新しい快楽に思えたのである[30].

スワンが感じた「新しい快楽」とは，とどのつまりオデットという一人の女性を所有するという行為に他ならないが，それが「カトレア」という花の名前で表現されることによって，彼だけの独自の快楽として描かれる．男女の肉体関係という凡庸な行為が，彼らの想い出の契機となった「カトレア」という言葉によって，これまでなかった新しい快楽へと変化するのである．これはたとえば，先にみてきた « garrulité » といった語が，ブリア自身の語る快楽と結びつくのと同じ構造をしてはいないだろうか．というのも，新語を使用する場合，その語は「自分だけが使用している」という前提が明白であるからであり，したがって，対象がいくらありふれたものであっても，その表現が独自なものであればあるほど，そしてそれが個人的な記憶や具体的な動機と結びついてればいるほど，そこからうまれる「味」« goût » は，独自のものとなるからだ．そしてまさにスワンが，オデットと肉体関係を「カトレア」と名付ける作業は，語ることによってこの「味」が変化することを端的に示している．

実際，バルトは味覚と時間に関する考察の中で，プルーストのマドレーヌを例にとって，次のように指摘する．

> 味覚の贅沢たるゆえんはまさにこの階段の中にある．味覚のはたらきが時間に依存しているがゆえに，はたせるかな，それは物語あるいは言語に似た展開さえしないでもない．時間化された味覚は驚異を知り繊細を知る．［…］プルーストのマドレーヌがB=Sによって分析されていけないはずはなかろう[31].

味覚と言語を物語に結びつけるバルトは，段階を踏んで展開する時間の要素を持ち出すことによって，プルーストのマドレーヌと，ブリアの「味覚」« goût » に関する考察を比較している．ブリアの表現への執着からもわかる通り，「味覚」« goût » は決して食物の風味（saveur）だけに還元されない．このことを示すのが，記憶すなわち物語を呼び覚ます契機となるマドレーヌであり，先に挙げた「カトレア」であるといえるだろう．「名付け」によってありきたりな対象の「味」« goût » が変化するように，« goût » はその後ろにある記憶や物語をも引き出す．つまり，言語によって対象から引き出される「味」« goût » は，常に表現によって変化するのである．食物や肉体が接触し，自らのものとなることで得られる身体的快楽と，ど

こにでもあるような対象を表現によって唯一無二のもの，すなわち自らのものにしてしまう快楽は，舌 / 言語（langue）を使用する点において表裏一体である．それゆえ，その快楽のうちに生じる「味」« goût » は，ときには身体のうちに，またあるときには言語表現のうちに立ち現れる．そしてそれはまさに，語ることによって喚起され，段階を経て変化する « goût » の重層的な側面であるといえよう．

おわりに

ここまで，ブリアの『味覚の生理学』におけるネオロジスムに着目し，その用法と作中における意義を検討してきた．そしてブリアにおける言語表現に対しての関心は，「味覚」の重層性を提示するだけでなく，その重層性そのものを生み出すことにも寄与していることを見てきた．

さて，一連の考察を通して立ち現れる « goût » を，表現という点から考えてみると，ブリアが新語の使用を通してわれわれに見せているのは，味わいの豊かさには必ずしも限定されない，« goût » の持つ語りとの結びつきであるといえよう．食べ物という我々が実際に口にできる対象について語るとき，われわれは同時に表現とその対象そのものを欲することができるが，実は名指される対象から引き出される「味覚」は，対象そのものには必ずしも還元されない．たとえばプルーストのマドレーヌのエピソードが端的にそのことを示しているように，書かれた「味」の背後には，時間や想い出，さらに物語といった厚みがあり，それは食べ物を喚起する食卓の描写によってではなく，むしろ「味」の表現によって表出する．このことはまた，ブリアだけにとどまらず，多くの作家が食に関心を抱き，また食について書き遺してきたことにも通じるだろう．実際，ブリアの新語に関する問題は，食と文学を結ぶ結び目を紐解く可能性を含んでいる．というのも，« goût » の源流の一つであるイタリア語の « gusto » にはもともと，一つの様式や芸術家を同一化するための原理という意味があり，16 世紀イタリアにおいては特にこの意味において用いられてきた経緯を持っているからだ[32]．つまり « goût » は，その起源において，特定の人物のやり方をそれと判るための基準となるもの，すなわち芸術家の「スタイル」に通じていくものでもあったのだ．そしてこのスタイルという類義語は，そのまま文体の問題にも関連する．実際，ブリアの用いるネオロジスムは，まさに彼の表現方法の特徴であり，文体の創出に寄与しているのである．

注

1) この点に関しては，ロラン・バルトが 1975 年の『味覚の生理学』に付した序論で既に指摘している．Roland Barthes, *Lecture de Brillat-Savarin*, dans *Œuvres complètes*, t. IV, 1972-1976, Seuil, pp. 821-822.（松島征訳，『ロラン・バルト＜味覚の生理学＞を読む』，みすず書房，1985 年，38 頁）.
2) Brillat-Savarin, *Physiologie du Goût*., coll. « Champs », Flammarion, 1982, p. 37.（関根秀雄・戸部松実訳 ,『美味礼賛』, 岩波書店 , 1967 年 , 上巻，44-45 頁）．訳語は適宜改変を加えた.
3) Jean Pruvost et Jean-François Sablayrolles, *Les Néologismes*, PUF, 2003, pp. 3-4.
4) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 37（前掲書，上巻，44 頁）.
5) Brillat-Savarin, *op. cit*., pp. 35-36（前掲書，上巻，42-43 頁）.
6) Brillat-Savarin, *op. cit*., pp. 36-37（前掲書，上巻，44 頁）.
7) Brillat-Savarin, *op. cit*., p.51（前掲書，上巻，67 頁）.
8) ヴォルフガング・シヴェルブシュ，『楽園・味覚・理性』，福本義憲訳，法政大学出版，1988 年，3-15 頁.
9) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 36（前掲書，上巻，43-44 頁）.
10) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 38（前掲書，上巻，46-7 頁）.
11) Barthes, *op. cit*., p. 809（前掲書，4-6 頁）.
12) Brillat-Savarin, *op. cit*., p.56（前掲書，上巻，75 頁）．因みに訳文では「掃除運動」と表記されているが，語の語源により忠実と思われる「箒運動」を用いた.
13) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 119（前掲書，上巻，165-166 頁）.
14) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 182（前掲書，上巻，253-254 頁）.
15) *Trésor de la Langue française informatisée* の中にしか記載されておらず，また紙媒体の事典には参照項目がない．しかし，ブリア以外の例文がないことから，彼だけが使用した新語であると考えられる.
16) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 36（前掲書，上巻，43 頁）.
17) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 35（前掲書，上巻，41 頁）.
18) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 129（前掲書，上巻，178 頁）.
19) Brillat-Savarin, *op. cit*., p. 165（前掲書，上巻，230 頁）.
20) *Trésor de la langue française ; Dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle*, t. 15, Gallimard, 1992, p. 1308.
21) この点に関しては，橋本周子，「『味覚 goût』から「共食の楽しみ convivialité」へ―ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』読解―」，『美学』第 62 巻第 2 号（239 号），2011，13-24 頁．の中で既に指摘されており，じっさいに『リトレ』には「ブリアの新語」と明記されている.

22) Vladimir Jankélévitch, *Le-Je-ne-sais-quoi et le-presque-rien*, PUF, 1957, p. 117.
23) Barthes, *op. cit.*, pp. 815-816.（前掲書，21-22 頁）．一部改訳.
24) Paule Petitier, *Littérature et Idées politiques au XIXe siècle*, Nathan, 1996, p. 119.
25) Victor Hugo, « VII : Réponse à un acte d'accusation », dans *Les Contemplations, Œuvres Poétiques*, t. II, coll. « pléiade », Gallimard, 1967, pp. 494-495.
26) Victor Hugo, « Littérature et Philosophie mêlées », dans *Claude Geux ; Le dernier jour d'un condamné*, Hachette, 1858, p. 149.
27) Honoré de Balzac, *Le Cousin Pons, dans La Comédie Humaine*, t. VII, Gallimard, 1977, p. 675.『トレゾール』の「カフェ」の項目の中には語源の項目にバルザックの例文が掲載されている.
28) Honoré de Balzac, *Illusions perdues*, coll. « pléiade », Gallimard, 1977, p. 157（野崎歓・青木真紀子訳，『幻滅―メディア戦記』上巻，藤原書店，2000 年，56-57 頁）．一部改訳.
29) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, coll. « pléiade », Gallimard, 1976, pp. 90-93（平岡篤頼訳，『ゴリオ爺さん』，岩波文庫，1972 年，64-49 頁）.
30) Marcel Proust, *Du côté de chez Swan*, dans *À la recherche du temps perdu*, coll. « pléiade », Gallimard, 1987, pp. 230-231（吉川一義訳，『失われた時を求めて 2，スワン家のほうへ II』，岩波書店，2011 年，120-121 頁）.
31) Barthes, *op. cit.*, pp. 808-809.（前掲書，3-4 頁）．一部改訳.
32) *Vocabulaire européen des philosophies : Dictionnaire des intraduisibles*, sous la direction de Barbara Cassin, Seuil, 2004, pp. 515-517.